



心法
教訓

今昔道之聚

□ 9
4419



浪華 樹下先生著
全 浦川公左畫
不里以宛
不評翻所

心學 教諭 繪入
今昔道々集 全三冊

愛知書肆 文光堂



傳曰君子以多識前言往行以畜其德
誅之哉此言平復爾樹下先生去世
已九載其遺稿中有今昔道々の集三卷
頃其家人子弟上梓以公于世
頃之昔乃話を以て其志を
今の人乃心けりるを知りて其辭は切
丁寧なり且人情世態をうかひ
くみみしむるやうに



分類 了
番号 1020
通番

010189050050

阮公人也。陸徳明者、必（必ず）以（もつ）陽物有也。又、法也。又、孫
 後業乃計。何（いふ）じきく。陸徳と其の中。小つむ。又、例、冥（みよ）
 暗して人乃見ぬ。亦ありて暗くと見えぬ。又、人々の後乃肉
 かりけ。復の内へ入る。佛りくる中。正に戒孝弟の及ぶ志はる
 介あり。事や孔子の家。不仁の子なり。曾子乃教ふ。不孝は
 子なり。とやさされば。子孫孝弟の道と教ゆ。又、極、陸徳の
 大なるものなり。一夫乃主人。孝弟此道は志し。いつれ時ハ
 家内の老い云ふ及び親類縁者知者出への者まで小あつ
 遠く世間乃至文王に義理を毎々あそびし。又、無理能く

或ハ艱寡孤獨と云ふも北人未だ此をとおぼし能く又凶
年とて米穀高直にあり候も乃ぶご人々の我分限り
意ドカとぞ一放しに其於所の金銀ハ事小我
成し候と用ひ研ても其の廢多と云ひ余分とのけ
おれ能く時ハ東業作の差障はあづるも易く放ち米
るものなり初万幸に心を用ひ人ハ其の強徳者といふべ
きや保年中凶のころ米の價さうあて高直にあり既
餘りも乃ぶご時高直大坂町中へ云に及びぬと云
も能く云ふと云ふと初放し人々の名所すといふ



老婆が正直
人と感ぜむ

お忍の地より
懐き我心を
綴るお月



お忍の地より
懐き我心を
綴るお月

えのち見えて千候とて不持をけりてかゝりけり男
うき相意の人扱て小者一人に逢来りてけり
へ来てこれ財布なりと富あがり取らるる金の入る
振子に開け改むる金子ありて先乃曉るにや
いづれ何れとて傳授せしや今もゆくは小者不云つ事
彼女に逢え同くとてあせりて其方にも逢てゆき
所とてとて曉るの由所ハ極めて笑く日く人
日れて病乃余とはおぼれりて老なりけり今途中より
小財布と見附らるるこれ必し金のつらきやと小者

けりしとて我方せめて一両日の金持けりてあせり人となりて
度しきとてこれに今日の目と空しくそれば忽ち金持に
るが表しにやあはれねど其後一層金とてけり
甘男好然とて相て正妻欲のを要するなりとて
しとて財布と見附らるるこれ必し金のつらきやと小者
けりしとて我方せめて一両日の金持けりてあせり人となりて
かゝりけり男とて秋陰地の志ありてハあがたむ
いづれや○又今ハいづれ或る男途中にて向てこれ
式朱銀一両ありてあはれねど其後一層金とてけり

乃又向人處大根と賣出ぬ人未かり同じく廿五
朱とえつけて是も拾ふんと思ふ大根と賣ひ店まで
おぢやう大根の荷とは式朱のふちちりれば是乃男
け大根やふたふたおとがし細く除て下されと頼むけま
大根をのぞく君が荷物で君が体むのやと宣うを吹て
相ふふふ縁は彼男かふてふふふふ方の方物の下に
見つけおぢやうもふふふふふふふふ大根や君も足附
おぢやうらわらわらふふふふふふふふふふふふふ
荷の下にあるおぢやうの物とやあてふふふふふふふ

と性食にふ彼男汝坊い奴おれがあらん附て拾ふんとふふ
汝が荷をとりておぢやうも除て君が荷と取ふふふ
おんとするに大根や大ふたふたの荷物ふふと
も捕らぬおぢやう彼男大ふたふたの荷物と取ふふ
汝が荷のふに合ふふのふふ人取ふおぢやうの荷物と
乃人ふふふ双方をふふふふふふ中し歩入ふと捉捕ふ
ぬに換人ぬ人ふふふふふふの荷物と取ふふふふ
ふふふふ彼男換人ふふふふふふの下に式朱一ッ落て
ふふふふ拾ふふふふふふふふふふふふふふふふ



海
あつち
あつち
やも
うま
うま
賊旅人
謀らん
反つて
孤島小捨



舟中も心の中の花の金と集らんそのことして花を角
まうら湖水の毎毎へあつちき程なく三個も船を
けり護摩灰んふち中 稍て船が若く彼等が里つも近
かど一何分世船中とて集いさうな要なりと様々考へ
これども腹あきまふ不圖なづれ彼船頭とかゝる二人と
無理なすべし思ひ板船頭へ向いあふけ針較とかゝる
そ尾中うりあふ山けしうさう船頭あきつと驚たれども
胸とあつち考へんふ今若く立てふの指さふとはもさふ
ふまの何分程くけ望城とほ附ふもの下やと思ふ一うさ

すまじ 刈むの灰乃運のそや育らん 船頭迄度へ附護摩灰
對いむもくふら船中とて中く容易小取がううんふれ
より若く白ねしふふ高うりそあ巖山とてむて風系れ能
所也彼取ふふ一時船と若て傳乃風系と見えんやと傳い
仍り傳くけしとてそ集いしとて若くかんふふもさふ
ふまの灰も是究竟の端計なりとあふふ合を展るふれ
彼白く通くかれば護摩の灰あふ對い廿白石との入山
ふ極風系のうたれとす乃くさう後以候トやせと細りあね板
船頭對い白石一寸船と若て若くふれと云れば船頭もかひ

其より更なるに中しして無量、彼白衣の船をつけさらばうき
 とつて護摩の灰あれは火炎とて敷ふらう事、船頭もあゝ船を
 沖へ出りし二個の商人は、あゝと云い船頭を對い船を何處
 おせしぞや、船頭はさう云ひ、彼奴は護摩の灰で火をくち、且船
 方より大分の金と持ておどろき、と彼奴がよく知て来る
 所へ来て、途中で大場なるに、廿五人中でも廿五方
 二個、彼奴は一個、火流原なるから、きもせ、火で船を抱込
 同様に、その尾を、取らう、山にけし、すく、お涙をかけ、し
 ぬけ、奴中の一をうて、火のな、廿五方、り、そ、仕、と

けりし使さうで干物ふかすに色は涼さか
 凡百の中にも
 せしは何れに性も二百里程のまじり
 翼があらば恥るの
 せぬかるるをいふと
 捨れるも金く彼奴が自業自得と
 りのし使にけきあ人嫌で
 大に縁に相く危うと
 通きしも
 神佛の冥助に先祖の沙汰に
 恨ぶ中にも
 船頭は對
 いさう方へ
 慥ふに
 出る人か
 義彼悪黨者
 二回んせ
 ば禁二個が
 今に
 何れに
 したと
 救回を
 赤んと
 感とる
 扱彼護摩の灰は
 白石
 へあざと
 忽ち
 船は
 怖る
 志あざと
 まき
 船頭
 船と
 ども
 や
 ぞ
 早く
 是で
 下され
 と
 志
 と
 恥
 む
 け
 ば
 船頭
 大
 勢
 う
 ぞ
 己
 乃

招ふ人盗人いそ行で平杓小舟を自滅するが是れぞの死に
トヤと云ひくさつて仕返しを授けて船を漕ぐに
積唐の灰も遠方小舟を捨てたれは舟をよ船をよ
かき廻して果て難いけきど何もの船も世白く人の居る
いささうあふりや何ぞ天狗に抱く遠く有るに
幸やうや、陸の神、案が、トヤと恥けるふいふを
をよ船もあふり、トヤと恥けるふいふを
後、絶てあふり、トヤと恥けるふいふを
陸の神、案が、トヤと恥けるふいふを

ふもかや其のうへ人も今にありあふり、トヤと恥けるふいふを
と積唐の灰の陰影も是れぞの死に
人、地、陰影、人のふも今にありあふり、トヤと恥けるふいふを
ふもかや其のうへ人も今にありあふり、トヤと恥けるふいふを
と積唐の灰の陰影も是れぞの死に
人、地、陰影、人のふも今にありあふり、トヤと恥けるふいふを

少女急小迷ふ

夜山中と

獨歩

仁物



淋し

上

望み

柳

急乃燃れ

何し

虫

毛



あけく破戸を穿てんまふ女あり婦人あり寝るにあらざるを
同様のびて浪花に生るゝと驚きし主の婦人たもあらざるを
通らせりて何程の用事ゆつてお更にけり後者よりて
只一人たりとて云ふも婦人よりて「おきよあゝぬ山
路のうらもゝゝ感ふんぞ俺のうらも」世の奇を吟じたり
世なりと云ふもまどふつとありぬと感ふも救ふあれと婦人又
歌にまゝと云ふもとて其の根基をけ婦人よりて「浪花
毒にけり」此際一夫乃有るが寝るのうらもと云ふも本へゆり居
まゝも鬼角浪むけ男とあはる縁と云れとて身とけり

思ふにむすそ父母同胞のそ業も空吹風と耳へ入るに唯う
くそ思ふも復美乃方とゆうとあやせとてまふ思ふ
乃雪の夜も虎とす跡もいひかくあるも乃あはる
帝女の一念凝くて鬼女と化生し地體もあや
らんまゝにける周知と懼しもまふ思ふ
まゝも思ふとて又世に又世に大に思ふ
今いむし紀州有田の那栖原乃里に父ありて母と十一歳小
なるを思ふと唯二人あはる月日を送りけり母ハ
風乃を地とけりて日とて暮る食事もまふお外なる

と娘をへて憂ひて昼夜傍と泣きけり病乃
隙と見念母何なりともなれよ若お好の品もつて
細く糸のへてゝ慰めもきかぬ娘に對ひ飯の類ひに施て
ほくは密柑のつるりしやうも密柑はつてと馳せ
中へは初生乃指しおとせぬしおれはきつせとつて
けき娘は是とつても何も母に密柑を進めたりとあり孝
親の誅より思ふも外の方へ出て往くありと十夜入下
河の坂と越て彼みうん山へをりりし小多し密柑と二
二夜をて彼へ入しと廿四とちる若ん附けし夜中といひ抱の

何や分らねど娘籍者とむねをせつたききもけり捕見
まは初めの女子なり初る西園乃をきき娘終つてこれおど
密柑やかぬ娘はむい何故に夜中おびて密柑減る
しやと母も娘はあつての故とて母の好むものなり何
密柑あつた母に近うしとてつて新しきものなりと
来て主たる密柑も思ふに難いしとて一夜に半は減りしと
されと半は減りしとて何れに細く糸を考へん感慨
して熱せし密柑を十つをうりて云ふは末初生の款と
海神人よりうりて御上の心をあはれしとて其方若

根元と牛あゝかて縁ありのうもくけいたうと傍り
けくあんされあゝもさ歌のうもあゝとんも故に人
教とまて礼倫のうもあゝわぬう世と意といひ及との意
意中の意と衣あゝの意はうに意は通のうも
及意はわく相乃縁のうもはり一と意はうと意は
及意はうと意はう乃縁のうもはり一と意はうと意は
知るといふ意の及意はうもはり一と意はうと意は
今むう一南朝の宮はうもい一やと意はうと意は
内侍とせし及びあゝ人なり其の意はうと意は
うと意はうと意はうと意はうと意はうと意は

一と揚柳の葉乃風もびた又雪古の葉乃風も
かどとむうに教もむも花もむも花もむも花も
るる意はうと意はうと意はうと意はうと意は
傳く意はうと意はうと意はうと意はうと意は
いの甲斐と意はうと意はうと意はうと意は
まはうと意はうと意はうと意はうと意は
嫌一縁と内侍の叶へ送とせも偏舟の意は
も知る意はうと意はうと意はうと意は
てみして同いせぬと途中とて奈いれと等と意は

ちりきり
 魏いさ
 やゆ様
 心来
 師直が質迎
 楠正行お
 會て敗走
 い



入る者道之五
 上る者

長風
 ちりきり
 魏いさ
 やゆ様
 心来



入る者道之五
 上る者

彼處止めしと下知のふく質役の者どもは一人サドと扱つきて切く
 かる世方なきふく福氏の存等も一騎あ千のふあればさうハ
 以て難縁とて教ども切まきまば捨痛未練の質役の役者どもは
 うまうと興と捨てぞ逃去するふれどもあつてみぬとてい
 ぐハ内侍ハりしりどもありく流りのふねねとてあやふと事
 あまといとてさるる事とせ直松右邸の宮へ送り来せらるるま
 け由あり聞ゆゆ今始めぬるあづふの御とて神妙と
 と清感の候ふにけりふ末定する妻もろる事とて毎の内侍とふの
 宿乃妻と下るる事とて名内侍の父君某とて内侍初りあまは

某々も有難く思存のいぬけは内侍の候へども世々智仁勇は云々
 是れは正にあらばいぬけは内侍の候へども世々智仁勇は云々
 向御執役はつれづれ正に候で申さる所仁恵の御執役は
 二つての面目有難くもな候は末は幸末練の御役は軍
 とあるのみ立上り苟も亡父の志とつてこそ精肯と承けざるを
 御執と云ふも申さるゝはつれづれども臣御ある方へ世々智仁勇は云々
 是れは正にあらばいぬけは内侍の候へども世々智仁勇は云々
 向御執役はつれづれ正に候で申さる所仁恵の御執役は
 二つての面目有難くもな候は末は幸末練の御役は軍
 とあるのみ立上り苟も亡父の志とつてこそ精肯と承けざるを
 御執と云ふも申さるゝはつれづれども臣御ある方へ世々智仁勇は云々

体は二代の悪居感に罹りしやあらうればせし衆に遠くは
 希きとして四索魂の合戦に打ちて名実代に暉うた今拂ひ
 功あり夫よりく不我れ倫の保て奈いみんや師車と面
 向う人あれむいひて不鬼高に哭あふばや情まざるらんやあれか
 ほきてる遠い吐しけり或はの庭に築山がえりて造りけり
 しと客来うんと答れば家の内義が是はあへんてんごうに
 梅すしと云れが客床にて我女房のまゝあるは流石は清原の
 内儀などいつて笑ひるや奇麗な築山と答へて是は名流
 ぞんかうに梅さしと云きとぞ何ぞは梅木をの切ある者がけりこのふ

性海
卷之四

性海